

二〇二一年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は23ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例:

--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(白河院が、「春宮の御子」ということで)
白河院、春宮の宮とて、^{※2}康平のころ、^A十歳ばかりにて御参内の時、「^{※3}座籍は何様の所にて候ふべきや」と、春宮に問ひ奉られければ、「^{※4}うるせく問はせ給ひたり」とて、¹感じ奉られながら、「^{※5}孫廂などにてこそあらんすらめ」と仰せられけり。さて萩の戸の方より参らしめ給ひければ、^{※6}主上、^{※7}昼御座にいらつしやつて、^Bおはしまして、「それへ」と仰せ言ありければ、^{※8}弘廂に御膝を突きてゐんとせさせ給ひけるを、^{※9}大ニ条殿、御前に候はせ給ひけるが、「これへ」とて膝の上にすゑさせ給ひけり。²後三条院、この事を始終うれしき事に思しめしたりけり。^{おほ}

『古事談』 一部改変したところがある。

※1 春宮の宮…白河院の父は、この時春宮であつた後三条天皇(尊仁)。後三条天皇は、藤原摂関家との関係が薄く、このまま後三条・白河と皇統が続くのか不安な情勢下にあつた。

※2 康平…一〇五八〜六五年。

※3 座籍…位に応じて決まっている席。

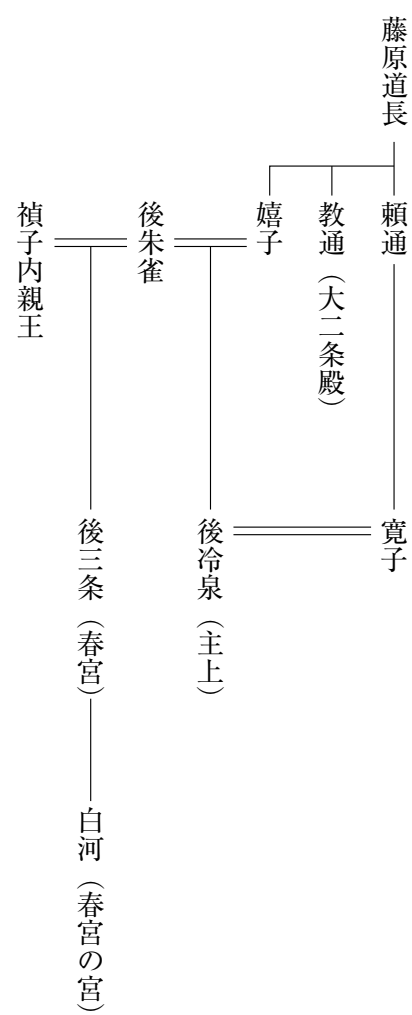
※4 孫廂…天皇のいる「昼御座」は母屋から廂にかけて設けられ、「孫廂」はその外側にある。座位は低い。後の「弘廂」と同じ。

※5 萩の戸…清涼殿の北側にある二間のうち、東側にある間。

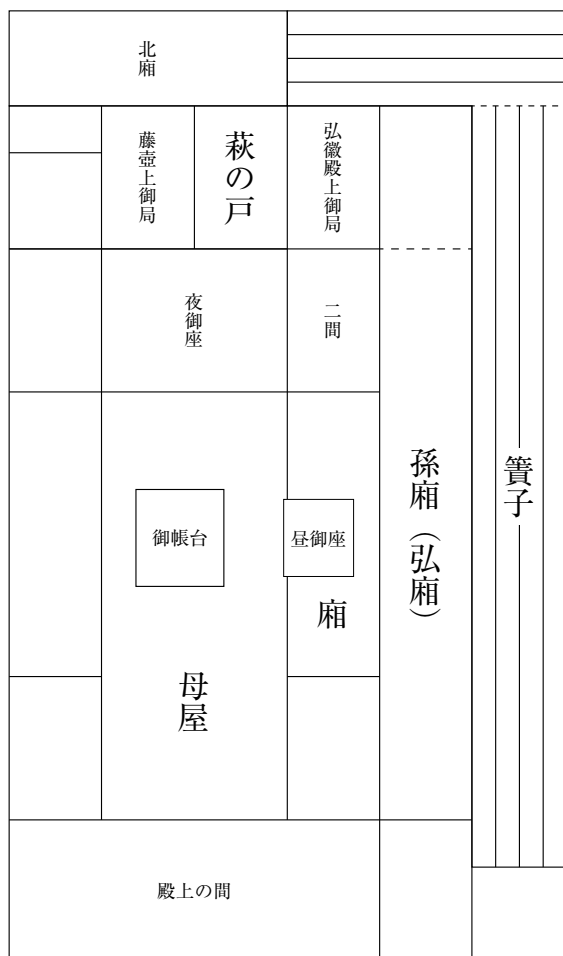
※6 御膝を突きて…ひざまずいて。臣下の礼である。

※7 大ニ条殿…藤原教通。藤原道長の子、藤原頼通の同母弟。この時右大臣で、春宮傳(春宮の後見役)を務めていた。

【人物関係図】



【清涼殿略図】



問一 ――― A「十歳ばかりにて御参内の時」、――― B「それへ」の意味として、最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

A「十歳ばかりにて御参内の時」

- 1 十歳くらいで内裏に参上した時
- 2 たった十歳で才能を認められた時
- 3 たった十歳で帝のお側に呼ばれた時
- 4 十歳くらいでお参りに連れていかれた時

B「それへ」

- 1 楽にしなさい
- 2 これを見なさい
- 3 そこに座りなさい
- 4 さあ、いらっしゃい

問二 ――― 1「感じ奉られ」とあるが、なぜ「感じ（感心し）」たのかを説明したものととして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 周囲の思惑を配慮し、けなげに自ら卑下した行動を取ろうとしているから。
- 2 自分のおかれた状況を考え、それにふさわしい行動を取ろうとしているから。
- 3 自身の判断だけに頼ることなく、多角的に物事を捉えようとしているから。
- 4 普通は見過ごしてしまうような小さな事柄にも、重要性を見出しているから。

問三 ——— 2 「後三条院、この事を始終うれしき事に思しめしたりけり」とあるが、その理由を説明したものとして最も適するものを次の中から選

び、番号で答えなさい。

- 1 大一条殿が白河院を気に入り、人目も気にせずかわいがってくれるのが嬉しかったから。
- 2 困っている白河院の様子を見かねた大一条殿が、すかさず救いの手を差し伸べてくれたから。
- 3 大一条殿が機転を利かせてくれたおかげで、白河院が恥ずかしい思いをせずにすんだから。
- 4 春宮や白河院の後見である大一条殿が、席次について温かく力強い配慮をしてくれたから。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

きっかけは何だったのかという質問を受けることがある。一度や二度ではない。そのたびに、人はどうしてきっかけが好きなのだろうかと考えさせられることになる。

さあ、なんだったかしらねえ。――答になっていないことはショウチ^あしている。

きっかけなんて、ちょっとしたはずみのようなものではないか。もともと盥^{たぎ}には水がいっぱいに張っていたのだ。そこへ一滴落ちることによってあふれてしまう。その一滴が何だったのか、滴^{しずく}がいつどんなふうにもたらされたのか。そこが最もわかりやすくドラマティックであることは私にもわかる。しかし、もともと盥^あにあった水のほうこそ大事なのではないか。インタビュアーなら尚^{なほ}のこと、溜^たまっていた水に興味を向けるべきではないか。

更に話を聞きたいようなら、別の答え方をすることもある。昔の恋人がきっかけなのよ、というものだ。すると彼または彼女はうなずいてみせ、おいしいものを食べることの好きな方だったのでしょうね、と相槌^{あいつち}を打つ。そうね、と私は微笑む。おいしいものを食べるのが嫌いな人っているのかしら。

ごくまれに、熱心なインタビュアーが訪れる。質問をいくつか受けてみれば、すぐにそれがわかる。私の書いた料理本をしつかりと読み、自分でもいくつかつくってみる。それを食べておいしいと感じたときにだけ、質問というものは形を変えるらしい。彼らの質問は他のたくさんの人々の質問のように、ジェリービーンズみたいなふにゃふにゃの楕円^{だえん}では決してなく、こちらの胸に食い込むための楔形^{くわきがた}をしている。

今日私のスタジオへおずおずとやってきたインタビュアーは、まだ二十代前半^{おほ}と思しき、小柄で額の広い、リハツ^いそうなお嬢さんだった。しかし、如何^{いかん}せん若い。ひと目見ただけで、この人の質問はきつと無花果^{いちじく}のような形をしているのではないかと思えた。私の仕事は料理をつくること、そのつくり方を本に書くことだ。インタビュアーに答えることではない。ヨウリヨウ^うを得ないインタビュアーに仕事場でうろろろされると足手まといになる。

彼女が現れたとき、それを危惧^{きぐ}した。いつまでも親元で暮らしているような、学生とあまり変わらない気分で生活している女の子に話をしても、うわべしか聞き取ってはくれない。幸か不幸か私にはそれがよくわかってしまう。なにしろ私自身がそうだったのだから。彼女くらいの頃の私は人の話を聞くこともできない、自分が何を求めているのかもわからないお嬢さんだった。

とにかく、私の書いた本を読んでつくってみてほしいと思う。直接私が話すよりもずっとたくさんのことをわかってもらえるだろう。

それで、彼女が私にする前に、私の方から質問をした。

「私の料理で何か気に入ってくれたものはあるかしら」

すると、彼女の頬が ア 赤くなった。

「ズッキーニのスープ、です。レンズ豆との相性が抜群だと思います」

おや、と私は思った。ズッキーニのスープを挙げる人はめずらしい。こんなにメディアに取りあげられるようになる前の、つまりあまり売れなかった本に載せていたメニューだった。地味で目立たず写真映えもしないので、モノクロの頁に掲載されていたはずだ。

「ほかに、たくさんあります。干し海老と椎茸の炊き込みご飯、烏賊とひよこ豆のガーリック炒め、私の定番料理になりました。それから、トマトと玉葱のスープの、黄金の比率というの、素晴らしいと思います。比率さえ間違えなければ誰にでもゴクジヨウのスープが作れるなんて」

おずおずと見たのはよほど緊張していたせいだったらしい。この人の言葉は礼儀正しいのに堂々としている。私のつくるものをほんとうに気に入ってくれているのが伝わってくる。

「よく読んでくれるのね。どうもありがとう」

私がいうと、彼女はますます頬を赤く染めた。その初々しい姿に、まだ芽を出したばかりの青い筍の匂いをかいだ気がした。

朱鞠内湖のことを話そうか。

盥に落ちた最後の一滴。それが朱鞠内湖だった。久しぶりに口にしてみたいような気持ちになっていた。

この仕事を始めたきっかけが朱鞠内湖だと答えると、相手は大概腑に落ちないという顔をする。北海道の、道北中央部にある美しい湖。その朱鞠内湖に料理作家と結びつくようないたい何があったのかと不思議に思うらしい。あるいは、目を輝かせる。いよいよ何か面白い話が聞けるんじゃないかと期待して。何もなかったのよ、という答が返されるとは思ってもいない。朱鞠内湖 A、ではなく、朱鞠内湖 B 何があったのか、という質問でもほとんど同じことだ。私の個人的な感想としては、そこ A 何があったのかより、そこ B 何があったのかと尋ねる方が気が利いていると思うが。

その若いインタビューはきちんと、朱鞠内湖 C、と訊いた。

「何があったのでしょうか」

瞳をまっすぐこちらに向けている彼女に少し申し訳ないと思いつつ、私は答える。何もなかったの、ほんとうに何もなかったのよ、と。ではどうしてそこにいらつしたのですか、と彼女は重ねて尋ねる。美しいから、というしかない。朱鞠内湖はとても美しい。それは事実だ。

私はまず朱鞠内湖の場所を教える。テーブルの上で紙に簡単な地図を書き、JRの——当時は国鉄だった——列車がすぐ近くを走っていたことも付け加える。

「列車に乗って通ると、白樺の林の向こうに輝くような湖が見えてくる。まばゆくて言葉も出ないくらいだった」

そして、それが朱鞠内湖のすべてだった。

私たちは初冬の、東京でならまだマフラーも手袋も気が早すぎて笑われてしまいそうな季節に朱鞠内湖を訪れ、凍てつく空気の底で陽光を反射して輝く湖を見た。湖面は鏡のように静かで、まるで水自体が発光しているかのようだった。

繰り返すけれど、それが朱鞠内湖のすべてだ。ほかには何も、まるで何も、なかった。

もともと景色の美しさに惹かれて訪れたのではない。その名前の響きの美しさに吸い寄せられた。しゅまりないこ。そう発音した途端に唇からこぼれる小さな踊り子たちがお辞儀をするような感じ。しゅまりないこ。その名前は完璧に美しい。ただただそこに惹かれた。私と、その頃何もかもを賭けるくらい思い詰めて逢瀬を重ねた恋人との、初めての旅だった。

一日じゅう湖の畔に佇んでいた。ときおり、遠くで魚が跳ねる音が聞こえた。あとは何も起こらなかった。一分と一時間がほとんど同じ重さしか持たず、今この瞬間が永遠に続くかのよう思われた。

「永遠、ですか」

インタビューはそういつて頬を染める。そして

イ

首を振る。

「美しい旅だったですね」

私はそれには答えない。朱鞠内湖は美しかった。しかし旅が美しかったかどうか、今になってもわからない。

二日間、と最初彼はいった。二日なら休める、と少し得意そうにして。当時は今ほど長い休みを取るのがあたりまえではなかったにしても、二日で旅はできない。特に、逃避行のつもりの、人生が変わるかもしれない道行きに二日しか充てられないのではお話にならない。そういうと、彼がとても困った顔をしたのを覚えている。結局、五日になった。彼がどんな苦慮の上に五日間の休暇を得たのか、私は知らない。知ろうとしなかった。

彼は大学の研究室にツトめる助手だった。教授、助教授、室長、講師、助手、研究員、等々身分は細かく分かれていたようだ。私は彼がどんな研究をしていてどんな立場にあるのか、ほとんどわかっていなかった。知りたいと思って何度も話を聞くのだけれど、いつも途中でどうでもいいような気持ちになってしまった。彼がどんな立場でどんな研究をしようかと、私といるときには関係がない。もちろん関係がないはずはなかったのに、きつとそんなふうに思っていたのだと思う。今ふたりの間にあるものだけを大事にしたい。その思いであふれそうだった。二十歳そこそこだった私は、生まれて初めて男の人を愛しているという実感に身も心も震わせていた。彼に、というよりもその事実に夢中だったのかもしれない。

家にはお手伝いさんが住み込み、それとは別に家庭教師や料理人が通ってきた。私は自分では何もする必要がなかった。それが普通ではないというすす感じではいたけれど、つきあう友人たちも皆似たような環境にいたから、特別だと意識する機会もなかった。短大を出て、親の会社に名前だけ入っ

た。働いたことはない。実質は家事手伝いというより行儀見習いの、つまりは嫁入り修業中の身だった。

ある日、飼っていた熱帯魚が水面に浮かんでいるのを見つけて大騒ぎになった。他でもない、この私が大騒ぎをしたのだ。騒げば誰かが何とかしてくれると思っていた。家の人たちは慌てて相談したらしい。家庭教師の伝^{つて}をたどって青年が連れてこられた。ずいぶん日に焼けた青年だった。濱岡と名乗った彼は、海洋生物研究室というところで研究をしている、学生と研究者と肉体労働者の中間のような者だと自らを紹介した。

「なんとかして私の魚を助けて」

挨拶^{あいさつ}を遮るように、私はいった。彼は^{おまたた}大股に水槽に近づいてしばらく様子を見ていたけれど、こちらを振り向き、

「あきらめたほうがいい」

といった。

「勝手なことをいわないで。そんな簡単にあきらめられるわけがないでしょう」

半ば叫ぶように私がいうと、彼は唇を固く結びしばらく黙っていた。それから、取り乱す私を穏やかな声で諭した。

「叫んでもしかたのないことはあるのです」

大げさにいえば、その声に平手を張られたような気がした。叫んでもしかたのないことがあるということ、そのときまで私は知らされていなかった。おかしい話だ。すでに二十歳だったのだ。知るとか知らされるとかそんな歳^{とし}ではなかったはずだ。熱帯魚の死に限ったことではない。叫ぼうが騒ごうがどうしようもないことがあるのだと、その事実が彼の声によって初めて身体の中にどすんと入ってきた感じがした。

私は彼を

ウ

見た。見たことのない顔、見たことのない声、そして見たことのないまなざし。新³しい人だ、と思った。初めての人だといいかえてもいい。今まで自分のまわりにいた人たちが急に皆同じ顔に見え、この人こそが私にとって唯一^{ゆい}ほんとうの人間であるような気がした。

あとで本人が語ったところによると、彼にとっても私はまるで見たことのない人間だったらしい。それはそうだろうと思う。出会った頃の私はまったく野蛮で無作法な人間だった。彼といふとそのことがよくわかった。富んでいるのは外側だけで、実際の私は貧しかった。

ほどほどの知性と教養があり、家庭内の始末に^た長け、いつも穏やかに微笑んでいる。そういう娘に育つはずだった。皮肉なことに、父や母が望んだような娘の姿から私は程遠く、彼にとつての理想の女性像がもしあったなら、そこにもはるかに及ばなかっただろう。幸いなことに、彼はこれまで女性に心を砕いた経験がなかったらしい。二十年間目覚めることのなかった私の奥底から噴き出すマグマのようなエネルギーに彼は圧倒され、やがて私の情熱を受け入れざるを得なくなったのかもしれない。

もつとも、彼とつきあうのは生半可なことではなかった。両親は強く反対した。若く見えても彼は私よりひとまわり近く年上で、社会的にも経済的に

も将来有望とはいえず、家柄も釣り合わなかった。会う時間をつくることはもちろん、連絡を取りあうこともままならなかった。黙って見過ごしてくればやがて自然に消滅したかもしれない不恰好な恋は、咎められることでかえって遅く大きくなった。

熱い紅茶を入れたポットから若いインタビューの分をカップに注ぎ分ける。ありがとうございます、と彼女は口先で礼をいい、紅茶よりも話が聞きたいのだとまなざしで告げる。

「三十年、ううん、もっと前の話なのよ」

つい、言い訳をするような口調になる。

私の本の愛読者であるというこの若い人が生まれるずっと前のことだ。そう考えて、愕然とする。時間は流れていったのに、ついこのあいだ起きた出来事を語っているような気がしている。すぐ隣にあの人の澄んだ瞳があつて、光る湖をじっと見ている。木立を風が抜け、湖面にかすかに波が立つ。その様子をほんとうに

エ

思い出せるのだ。

あの頃考えていたよりも時が過ぎるのは早かった。あの頃の私は三十年どころか三年後の自分さえ思い描くことができなかった。

「思い切つて、ふたりに朱鞠内湖へ旅をしたのですね」

彼女は確かめるようにいった。

「そう、ほんとうに思い切つたわ」

旅先も、日数も、そもそもあの旅に出ること自体、家族には秘密だった。よほど思い切らなければできないことだった。

思い切つたところへ行くしかない気持ちだった。この人と一緒ならどこへでも行けるという気持ち、それがほんとうかどうかを確かめてみたい気持ち。ほんとうに決まっているじゃないの、と若かった私は胸を張った。たぶん、私は胸を張りたかったのだ。それまでの私はどんなに恵まれていようと胸を張れることなどひとつもなかった。自分のいる場所が岩盤のように固く、そのくせ脆いということを知っていた。なにしろ自分の足で立っているのではなかったのだから。

親の広げた傘の下でなく、雨に濡れても自分の足で歩いていきたい。そう初めて思った。彼との旅はそのための第一歩だったのかもしれない。そんなふうには思いたくないけれど。純粹に、彼と旅に出ることがうれしくてしかたがなかったのだと信じたいけれど。知りあつて間もない、けれど生まれて初めて本気で好きになったと思える人に夢を託した。

私が小さく笑っているのに気がついて、彼女も口元をほころばせる。

「よほど楽しい思い出がおりなのですね」

「いいえ、違うの。今になってみると自分のことがおかしいのよ。ぜんぜんわかってなかったのね。夢なんか人に託すものじゃないわ」⁴

私の言葉に彼女はわずかに首を傾げてみせる。

「列車の窓からのぞいた朱鞠内湖はほんとうに美しかった。ところが、列車を降りて、自分たちの足で歩いた湖の畔には何もなかったの。そこまでは話したわね」

「はい。何もないところだとご存じではなかったのですか」

「ある程度は知っていたわ。でもね、そこにはほんとうに、まったく何もなかったの。恐ろしいくらいの静寂しかなかった。言葉の遊びじゃないんだ」

私がいうと、彼女はうなずいた。

「言葉もなくなってしまったの」

「あまりにも何もなくて言葉をなくした、という比喩ではないということですね」

「もしもそうだったとしたら、驚きや落胆が落ち着けば、また言葉は戻ってきたはずよね」

「——でも、それはなかった」

私は微笑んでうなずこうとしてうまくいかず、二、三度瞬きをしてごまかした。

今でも背筋が凍るような、湖の畔での体験をはっきりと思い出すことができる。そのたびに、耳の奥がつんとなる。あの感じ、頭の芯が痺れてしまうような感じだけは、時間がどれだけ経っても忘れられるものではない。そういえば朱鞠内湖のあたりは日本の観測史上最低気温を刻んだ土地なのだろう。でももちろん気温の問題ではない。

あの初冬のよく晴れた日、私たちは並んで湖の畔に立ち、美しいけれど何も無い場所を眺めていた。何もないということがふたりにとってどれほどのものだっただろう。何もなくていいのだ。私たちはお互いさえあれば他には何もいらんはずだった。

どれくらい湖を見つめていたのだったか。凜と張りつめた凍てつく空気に頬を打たれ、いいのか、このままでいいのか、と鋭く問いかける無言の声を聞いた。私に向けられた声だったのか、恋人の胸に渦巻く声だったのか。横で恋人の身体がぐらりと傾ぐ気配があった。⁵

気がつく、確かだと思っていたものがひとつひとつ消えていくところだった。輝く湖面も、吹き渡る風も、茫漠と広がる空も、色を失っていた。狼

狼^{ばい}し、恐怖した。怖くて、隣に立っているはずの人の顔を見ることができなかった。もしも恋人まで色が薄れていたら、という恐れが頭を擡^{もた}げ、それと同時に、この変化が恋人から始まったのだと冷静に悟っていたような気もする。

「ごめん」

彼はいった。裏切ったのではない。⁶ただそこにある事実^{じじつ}に気がついてしまったというだけのことだ。彼がすべてを賭ける対象は恋ではなかった。私ではなかった、というべきか。朱鞠内湖を眺めるうちに、それがわかってしまった。恋人が色を失ったから、世界も色を失ったのだ。何ひとつ語るべき言葉を思いつくことができなかった。

悲しさや寂しさ、まして怒りより、困惑のほうが強かった。行き違いや衝突があったわけでは決していない。それなのに、こういう結末にしかたどりつけなかった。それでももう終わりなのだとも知ってしまった。初日の午後をそうして終えた。晩には黙りこくったままささやかな夕食を終え、別々に入浴を済ませ、離れて敷かれた蒲団^{ふとん}に寝た。

なぜそんなことになったのかはわからない。でも、泣いても無駄だということはわかっていた。叫んでもしかたのないことはあるのだ。初めて会ったあの日に彼が告げたように。

翌朝目を覚ますと、自分がどこにいるのかすぐには思い出すことができなかった。ただ、これまで二十年もいた オ した場所を遠く離れてしまったことだけは身に沁^しみてわかった。

「それで、どうなさったのですか」

若いインタビュアーは身を乗り出していた。

「目が覚めたときには彼はもういなかった。朝早く朱鞠内の地を発^たったのでしょね。私はひとりきりになった。でも、当初の予定通り、そこに留まることにしたの。心ゆくまでひとりでいようと思った」

マフラーを頭からすっぽりと被^{かぶ}り、耳や鼻まで覆^{おほ}うようにぐるぐる巻いて、湖の畔を歩いた。歩いても歩いてもひとりだった。湖に倒れて朽ちた木があつて、そのそばを通りかかったとき、私の身体から何かが抜けた気がした。茂る下草と黒く湿った土を踏み、歩くそばから音が消えていった。疲れると立ち止まって休んだ。何の音もしなかった。その死んだように静かな場所に留まるうちに、いつか自分はこういうところから来て、こういうところへ帰っていくのではないかと感じた。

怖かった。でも、それだけではない。冷え切った靴の中で爪先がじんじん鳴っていたけれど、それでも、生きていきたい、という欲求がまさにその冷えて感覚をなくした足元から立ち上ってくるのがわかった。

生きていきたいと、そういえば思ったことがなかった。生きているのがあたりまえだったからというだけでなく、あたりまえのように生きていただけて、生きているという実感を持ったこともなかったのだ。

「ところで私は旅行鞆かばんを持っていなかったの」

私の言葉にインタビューが顔を上げる。

「それまで、旅行には軽いボストンバッグを持つだけで、あとは誰かが持っていてくれたから。それで、あの五日間は、母の鞆を拝借してきた。きつと母が新婚旅行に使ったものね。昔ながらの角張った、餡色あめいろの革製の旅行鞆だったわ。二日目の晩だったか、その内ポケットに薄い本が一冊入っていることに気づいたの」

何の、と彼女は訊かなかった。ただ固唾かたずを呑んで話の続きを待っていた。

「文庫サイズの表紙に、クックブックと書かれていた。旅館での夜、ひとりの部屋で頁ぺじをめくったわ。モノクロの写真がついているだけの地味なレシピ集だった。私はむさぼるようにその一冊の本を読んだ」

他に読むものがなく、することがなかったから、ともいえる。私は翌日も朝から湖へ出かけて畔を歩き、切り株に腰をかけて凍えそうな指で頁を繰った。ふと目を上げると、昨日恐ろしいほどの孤独を突きつけてきた湖の表情が少し和らいでいた。

「そこに答があったのですね」

答、だろうか。式といったほうが近いかもしれない。

「朝から晩までその本を読んで、冷えてどうにもならなくなると宿へ戻って暖を取って。そうやって少しずつ読み進むうちに、料理ってなんてシンプルで美しいものなんだろうと思った。ここにぜんぶ書いてあるじゃないかって、だんだん目の前の霧が晴れていく感じがしたわ」

父の食道楽、母の料理自慢、そして選ばれた料理人の腕のよさ。それらが無意識のうちに盥くに汲まれた水だとすると、最後に垂らされた一滴がクックブックだった。

（宮下奈都『遠くの声に耳を澄ませて』より「クックブックの五日間」一部改変したところがある。）

問一 — あゝおのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓 a 「おずおずと」・ b 「むさぼるように」の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

a 「おずおずと」

- 1 居心地悪そうにしながらも、積極性のあるさま。
- 2 虚勢を張りながらも、不安が隠し切れないさま。
- 3 おびえたり自信がなかったりしたためらうさま。
- 4 喜びや期待により心が落ち着かないで騒ぐさま。

b 「むさぼるように」

- 1 真理を解き明かすかのように
- 2 際限なく貪欲にほしがるように
- 3 すべて暗記しつくすかのように
- 4 雑念の一切を振り払うかのように

問三 ア オ にあてはまる言葉として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 ぬくぬくと
- 2 まごまごと
- 3 さっと
- 4 うっとり
- 5 まじまじと

問四 — 1 「もともと鹽にあった水」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「私」にとつての「もともと鹽にあった水」とは何を指すか。文中から三十字以内で探し、その最初と最後の三字を抜き出しなさい。
- (2) 「もともと鹽にあった水」とはどのようなものか説明したものととして適するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分を他者と差異化するために必要な個性。
- 2 自分というものを形づくっている経験や知識。
- 3 自分が生きていくうえで譲ることのできない価値観。
- 4 自分がある方向へ進んでいくことを後押しするもの。
- 5 自分が物事を決定する際に判断基準としているもの。

問五 — 2 「久しぶりに口にしてみたいような気持ちになっていた」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 若いインタビュアーの様子が若かったころの自分自身に重なり、自分が何を求めているのかもわからないお嬢さんだった当時訪れた朱鞠内湖で、ことが久々に懐かしく思い出されたから。
- 2 料理本を読んで作り、「私」の料理に真摯に向き合ってくれているこのインタビュアーなら、朱鞠内湖の話をして、うわべだけではなく、「私」の思いなどもくみ取り理解しようとしてくれると思えたから。
- 3 インタビュアーが地味で目立たないメニューも含め、「私」のつくる料理をほめてくれたことで気分がよくなったので、そのお返しとして普段はあまり話すことのない朱鞠内湖の話を披露しようと思ったから。
- 4 礼儀正しいのに堂々としており、「私」のつくるものを本当に気に入ってくれているこのインタビュアーなら、朱鞠内湖の話を、思いが読者に伝わるような記事にまとめてくれるだろうと期待することができたから。

問六 A C にあてはまる助詞を、ひらがな一字でそれぞれ答えなさい。

問七 ― 3 「新しい人だ、と思った」とあるが、どのような点が「新しい」のか説明した次の文章のⅠ～Ⅲにあてはまる言葉を答えなさい。なおⅠにあてはまる言葉は十字で、Ⅱにあてはまる言葉は十一字で文中から抜き出しなさい。またⅢにあてはまる言葉は二十五字程度で答えなさい。

「私」は（Ⅰ） Ⅰ がないほど、何不自由のない環境で育ってきた。親やお手伝いさん、家庭教師などの今まで自分のまわりにいた人たちは、どんなときも助けてくれたので、この私に困ったことがあれば（Ⅱ） Ⅱ と思っていた。そんな中で「彼」が真正面から自分に向き合い、（Ⅲ） Ⅲ を突きつけてきたことによって、「彼」は自分にとって「新しい人だ」と「私」は感じている。

問八 ― 4 「夢なんか人に託すものじゃないわ」とあるが、「私」が人に託した夢とはどのようなものか。自分の言葉で五十字以内で答えなさい。

問九 ― 5 「横で恋人の身体がぐらりと傾ぐ気配があった」とあるが、この「恋人」の様子を説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 これまで熱に浮かされていたが、「私」以上に大事なものがあつたことに気づいてしまい動揺している様子。
- 2 自分がすべてを賭ける対象が恋ではなかったことを、「私」にどう伝えればよいのかと混乱している様子。
- 3 自分にとって大事なものを見誤っていたことに気づき、恋愛にかまけていたことを後悔している様子。
- 4 これまで信じていた「私」への強い思いが大きく揺らぎ、倒れてしまうほどに衝撃を受けている様子。

問十 ― 6 「ただそこにある事実」に気がついてしまったというだけのことだ」とあるが、その「事実」に気づかせることになった条件について説明した次の文章の□にあてはまる言葉を十字以内で答えなさい。

二人のつきあいに周囲から反対される日々や、仕事のある日常生活から遠く離れ、□ 場所に来て自分と相手の二人だけになったことで、「彼」はこの状態がいいのか自分自身と向き合い落ち着いて考えることになり、その結果、「ただそこにある事実」に気がついてしまった。

問十一 この文章について説明したものとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現在の「私」が過去を回想する形式がとられており、現在の「私」は過去の自分を冷静に振り返り、自身の愚かさや幼さを指摘している。
- 2 朱鞠内湖の話をインタビューが「私」に順に聞き取っていく形式で物語が進むため、「私」が一人で過去を回想するより「私」の心情が掘り下げられる構成となっている。
- 3 二人の別れの地となった朱鞠内湖だが、「私」が生きていきたいという欲求を抱き、料理作家となるきっかけを得た希望の場所にもなることは、「しゅまりないこ」という名前の響きの美しさによって、物語のはじめから暗示されている。
- 4 「私」の視点で物語が語られるため、「私」の心情は詳細に読み取ることができるが、その一方で恋人である「彼」の心情は「私」の視点を通して描かれていることに注意して読む必要がある。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現代の日本では、西洋由来の自然を守る「環境主義」が田畑に適用されることはほとんどありません。かと言って伝統的な百姓の自然観が再評価されることもありません。いつのまにか「田畑には、貴重な自然はない」という考え方が強くなってしまっています。

かつては「田んぼは自然かどうか」などと悩むことはありませんでした。しかし現代では農業は「自然破壊」²かどうかを百姓は考えるべきです。問題は農業や化学肥料の使用による環境問題だけではありません。さらに深刻なのは「もっと生産コストを下げましょう」と国家からも言われるようになる、「毎日田んぼで顔を合わせている蛙^{かえる}とも、これからは三日に一回にしないといけないのかな」と思わないといけないようになっていきます。これまで話してきたように、田畑という自然は元々の自然ではありませんが、身近な自然として、私たちを取りまいてくれ、四季折々の風物を届けてくれました。そういう自然を本気で守るためのまなざしが危機に^あチヨクメンしているのです。

しかも、こうした百姓の悩みは、だれも表に出そうとしていません。なぜなら、「個人的な」「主観的な」ありふれた価値でしかないからです。「それよりも、経済性の追求が重要だ」と、ことあるごとに言われているからです。ここに現代の「自然保護」の大きな問題の一つがあります。

人間は生きていく以上、食べものやくらしの材料を天地自然から受けとらなくてはなりません。人間には米や大豆や材木や魚や水を「つくる」ことはできないからです。これらを「つくる」のは天地自然ですから、人間はそれを手助けして、天地自然のめぐみをいただくしか生きる道は^アないのです。この天地自然からのめぐみのいただき方を豊かにしたのが、農業^イです。毎年変わらずにめぐみがもたらされる^ウように、様々な工夫をこらして仕事をしてきました。^エ

田んぼのまわりを小さな畦^{あぜ}（土手）で囲んで水を溜めるようにしたのは、誰が始めたのか、もう調べることはできませんがすごい発明でした。それから稲は、同じ場所で、毎年同じように育つことができるようになりました。天からの光と水をしっかり受けとめることができるようになったからです。しかし、田んぼを開くためにはそれまでの湿原や草原や森林を切り開かなければなりません。それまで水が少なかった所に遠くから水路を掘って、水を引いてこなければなりませんでした。それまでの自然環境とはちがった環境が生まれました。これを「自然破壊」だと考える人は誰もいませんでした。生きていくために懸命でした。しかし、何よりも天地自然への感謝の気持ちは^{オク}捧げられてきました。それは狩猟採集時代よりも強くなりました。感謝する気持ちは「受け身」の態度からしか生まれません。自分だけの力ではできないと自覚した時に、助けてくれる相手に感謝の気持ちを届けたいくなります。その相手が天地だとすると、感謝の気持ちは多くの百姓と共有できます。しかも昔は内からのまなざしだけで、生きている世界を見ていたので、思いはことのほか強く濃く、激しいものがありました。

こうして天地の名代として神さまが生まれ、生きとし生けるものに魂をやドらせ、人間自らも受け身でおのずから、つまり自然に生きることが当然のようになりました。そして、農業によって殺される生きものへの情愛が深くなっていくのです。もちろん西洋的な「自然破壊」や「自然保護」などという考え方はまったくありませんでしたが、それとは別の「生きものの殺生^{せつじやう}」や「生きもののたたり」を感じる感性は農業によって強まっていったのです。たしかに農業ほど生きものを殺す仕事はありません。「農業は自然破壊だ」という主張には反論できないような気分にもなります。しかし百姓にはそのことを悩んだ形跡が昔からほとんどありません。それはどうしてでしょうか。ここに「農業は自然破壊かどうか」に対する日本的な答えが隠されています。

〈中略〉

「農業は自然破壊だ」という見方と「農業は自然を支えている」という見方は、矛盾しているわけではありません。同じ世界を別々の見方で見ているに過ぎないからです。どちらの言い分にも耳を傾ける必要があります。しかし、現代では「農業は自然を支えている」という内からのまなざしの方は弱々しくなっています。なぜなら科学的な見方がユウセイだからです。このことを生きものへのまなざしを例にとつて比べてみましょう。

⁴「生物多様性」という言葉が広まってきたのは、一九九二年のリオデジャネイロでの地球環境サミットで、「生物多様性条約」が提起され、一九九三年に日本も一八番目の参加国になりました。しかしこの言葉の内容を知っている人は、福岡県では二〇一七年でも38%に過ぎません。外来の言葉で、普段は使うことがないからです。

「生物多様性」はわかりやすそうであるにもかかわらず。あなたが田んぼの中に入ったとします。いろいろな生きものと目を合わせて、話したりするでしょう。しかし「生物多様性」と目を合わせたりすることはありません。これは頭のなかで整理するときに現れる概念です。リンジョウ感^えのない、外からのまなざしのテンケイ^おです。これをあなたはひとつひとつの生きものの集合だとして、できるだけイメージが湧くようにしようとしますが、やはり思い浮かぶのはそれぞれの生きもののたちの姿ばかりです。だからこそ、「自然保護とは生物多様性の保護でもあるのですよ」という言い方は間違っているのですが、何か冷たい、実感が伴わない感じなのです。

たしかに「いろんな生きものがあるっていうことは、それだけの生きものが生きられる豊かな生態系があるってことでしょう」と言われると、そうだなと思います。しかし、そもそもそんなにいろいろな生きものがあることはいいいことなのでしょうか。これに答えることは、案外難しいことです。

《A》、生物多様性に匹敵する日本人の伝統的な言葉は何でしょうか。まあ、それがなければこの用語が用いられたのでしょうか、あえて探してみましよう。《B》「生きとし生けるものには命と魂がヤドっている」「無駄な殺生はしてはいけない」「虫も草も人間も生きもの同士だよ」という言葉が浮かびますが、どれも古くさく現代ではほとんど使われない言葉です。

これでは「生物多様性はなぜ大切か」という質問に対して、内から精神的、文化的には答えることができません。そこで、どうしても外からの見方で答えることになります。日本の環境省は、「生物多様性は人間に生態系サービスを提供するので大切である」と説明しています。「生態系サービス」とは、人類が生態系から得ている利益を指しています。それは四つに分けられています。

- ①食料・燃料・水・原材料などの「供給サービス」
- ②気候・大気成分・生物数などの「調整サービス」
- ③風景や体験の場、神秘的な体験などの「文化的サービス」
- ④生きものの生息環境、遺伝的な多様性の維持などの「生息地サービス」

これらの「生態系サービス」は「生物多様性」によつて支えられている、というわけです。「ある生きものが現在には役に立たなくても、将来たとえば癌の特効薬を産み出すかもしれないでしょう。だからどんな生きものでも守らなくてはなりません」という考え方が代表的なものです。しかし、すべての生きものに有用性が見つかるとは思えません。見つからない場合が多いでしょう。もし有用性が見つからなかつたら、守る理由はなくなるのでしょうか。そこで、役に立とうと立つまいと守らねばならないという理屈はないものでしょうか。「自然はそれ自体に価値がある。美しいし、そこに行けば気持ちがいいから」と主張したとしても、これも人間が感じているのですから、人間に役に立つ価値だと言われそうです。そうすると「生態系サービス」に入ってしまいます。

ほんとうに自然には、人間と関係ない価値はないのでしょうか。「自然保護思想」も「生物多様性」も「生態系サービス」も西洋からの輸入です。自然と人間を分けて、自然を外から見えています。科学的な見方です。だからこそ、なにか即物的で、生きものの生のぬくもりや息吹が感じられませんね。このようにどうしても外からの科学的な見方は、よそ事と思わせてしまいます。さらに、科学的な見方はどうしてもその時代の精神の主潮に合わせようとしてしまいます。現代社会を牽引しているのは資本主義の市場経済の価値観ですから、どうしても経済価値の劣るものは後回しにされてしまうのです。先の四項目に、(中略)「稲の葉を揺らしながら田んぼの上を渡っていく涼しい風」や「春になると畦に咲き乱れる野の花」は入っているでしょう。たぶん「ああ、それは《 C 》の個人的な表現ですね」で片付けられるでしょう。

「宇宙船地球号」や「地球環境」という言葉が一九九〇年頃から世界的に使われるようになりました。狭い地域や国を超えて地球規模で考えなければ、「地球温暖化」の問題や海を渡る鳥たちの保護や海洋を移動する鯨や魚などの保護は考えられない、という言い方は説得力があります。しかし、こ

ういうスケールの大きい見方は私たちの実感を伴いません。そこで科学的なデータに基づいた話になります。そうすると専門家の言い分に従わざるをえなくなります。

それはともすると、私たち一人一人の実感を軽んじ、みなさんが住んでいる在所（地域）の特性が眼中になくなります。地球全体の問題が優先されるようになります。

いずれにしても、これらの西洋発の新しい自然保護思想があまり広がっていないのは、近代化が進んだ国の事情と価値観を土台にしているので、世界各地のそれぞれの国に特有の生きものの観、天地自然観、生命観、生活観となかなかつながらないからです。

それにさらに大切なことは、「生物多様性」にしても「地球環境」にしても「自然保護」にしても、そこで生きている人の姿が見えないことです。あまりにも一般的に考えられ、誰にでも、どこにでも通用するような語り方をされるからです。具体的な事例であつても、そこで生きている人間の感覚（内からのまなざし）が表に出てこないからです。

こうした反省を踏まえて、現在では人間と自然の関係を考える学問・思想が「環境倫理」として一つの分野をなさそうしていますが、期待していいものでしょうか。

生きものが死んでいっても、また生まれて、生がくり返すことを見れば、どんなに安堵（あんど）することでしょう。これこそが、私たちが死を乗り越える最良の方法ではないでしょうか。百姓が「また今年も草が伸びる季節がやってきた」と話すときに、「草とりは大変ですね」という意味に受け取り、労苦ばかりを読み取ってきたのは間違いです。農業を近代化することがいいことだと思つていそう受け取るのです。

しかし、そこに「また草と会える。草とりができる」喜びと安堵を感じるからこそ、「草を殺す」という罪悪感を持たずに済んでいるのです。西洋の「自然保護」はここまで踏み込むことはありません。このことを科学者に話すと、「それは生物の再生のことですね」「死んで、分解されて、また生まれる物質循環のことですね」「そういう生態系は安定しているということですね」「生物種の持続のことですかね」などと、外からのまなざしだけで片付けようとしています。

生きものの一匹一匹の生死よりも、生態系全体を安定させ持続させていけば何の不都合もない、というのは「生物多様性」などに見られる外からのまなざしの特徴です。こうしたいかにも大局に立ったかのような視点は、身近な生きものの生死から目をそらすことになります。生きとし生けるものの死の上にこそ、自然もそして農業も成り立っていることを忘れてしまいます。

「また会える」という実感こそ、自然が変わらないことの実感でもあるのです。それは農業がずっと続けられてきた証でもあります。

（宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』一部改変したところがある。）

問一 ―― あゝおのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 《A》・《B》に入る言葉として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 ところで
- 2 あるいは
- 3 けれども
- 4 すると
- 5 なぜなら

問三 〜〜〜〜アゝエの単語の中で他の三つと品詞が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 ―― 1 「伝統的な百姓の自然観」とあるが、その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 人間は科学技術を駆使し未知の部分が多い自然を説明すべきだという考え方。
- 2 人間は生きものを創ったとされる自然をコントロールすべきだという考え方。
- 3 人間は助けてくれる自然に感謝の念を抱いて生きていくべきだという考え方。
- 4 人間は米や魚などを供給してくれる自然を保護していくべきだという考え方。

問五 ―― 2 「現代では農業は『自然破壊』かどうかを百姓は考えるべきです」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 近年重要視されている経済性の追求を基にした考え方を百姓が取り入れることで、環境問題以外の農業の問題点を明確にすることが可能となるから。
- 2 地球全体が「自然保護」をうたっているので、農業が自然に悪影響を及ぼさない事例について百姓たちも真剣に検討していく必要が生じてきたから。
- 3 百姓が自然破壊について関心をもっていないとすると、農薬や化学肥料などで害虫を殺している百姓が自然を破壊していると誤解されてしまうから。
- 4 考えることで明らかになる、百姓たちの感覚を多くの人に共有してもらうことが、生きものの生命を感じさせる自然を救うことにつながるから。

問六 ——— 3 「百姓にはそのことを悩んだ形跡が昔からほとんどありません」とあるが、その理由を六十字以内で答えなさい。

問七 ——— 4 「生物多様性」とあるが、筆者は「生物多様性」をどのようにとらえているか。その説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 「生物多様性」という思想は人間にとって有用だという印象を与えるが、生きている人間の実感にはつながりにくいので懐疑的にとらえている。
- 2 「生物多様性」という言葉は非常に便利で使い勝手が良いが、日本の伝統的な言葉には置き換えることができないので消極的にとらえている。
- 3 「生物多様性」という概念は自然を保護する上で重視しなければならないが、価値や利益と関連して用いられるので打算的にとらえている。
- 4 「生物多様性」という考えは世界中で使われるようになっていくが、用いる人間の国籍で意味が異なってくるので否定的にとらえている。

問八 《C》に入る言葉として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 供給できるサービス 2 調整するサービス 3 文化的なサービス 4 生息地のサービス

問九 ——— 5 「西洋の『自然保護』はここまで踏み込むことはありません」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 西洋の自然保護思想は、科学的に検証しながら自然の全体像を捉えようとする。そのため、生きものが生死をくり返すことを非科学的に信じながら農業をし、自然を犠牲にすることに罪悪感を持たない百姓とは、議論が成り立たないから。
- 2 西洋の自然保護思想は、個々の事象に目を向け、自然全体との相関関係を考察する。そのため、目の前でくり返される生きものの生と死の営みを自然全体に広げて考え、農業を続ける百姓の姿勢に、一考の価値があるとは思わないから。
- 3 西洋の自然保護思想は、自分たちの感覚や実感とは切り離して自然を包括的に考える。そのため、一つ一つの生きものの生死が目の前でくり返されることに自然の不変を実感して百姓が農業を続けているということに、思いが至らないから。
- 4 西洋の自然保護思想は、地域ごとの違いを踏まえ、情を排して自然を正確に把握しようとする。そのため、深い情愛をもって、自分の住む地域の自然や農業が保全されるように自然に手を入れてしまう百姓の仕事を、理解することができないから。

問十 本文に述べられている筆者の主張に合致するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 現代の日本の農業において、人々を取りまく身近な自然を守るための外からのまなざしは危機的な状況にある。
- 2 農業のために生きものを殺しても、「また会える」という思いが百姓の農業を続けていく支えとなっている。
- 3 人間にとって有用な生きものを数多く保護しているが、代表的なものは癌の特効薬を産み出す生物である。
- 4 人間と自然の関係を考える「環境倫理」という最先端の学問・思想を深めていくことで自然は守られる。

(問題は、これで終わりです。)

